

原 著

ポジティブな場面における幼児の社会的地位と意図の帰属との関係

吉村 齊^{1*}

要約：本研究は、ポジティブな情緒として喜びを取り上げ、喜びが生まれやすい場面における幼児の社会的地位と意図の帰属との関係を検討した。調査対象者は幼稚園4歳児クラスに所属する26名、5歳児クラスに所属する43名、合計69名であった。本研究は個別面接法によって調査が実施され、以下の結果が得られた。女児において、社会的地位H群では5歳児の意図の帰属得点が4歳児よりも高かった。つまり、多くの仲間から選択された5歳児の方が、4歳児より、仲間を喜ばせたいとする意図を適切に帰属していることが示唆された。他方、男児では、年児による有意差が認められなかった。また、社会的地位M群とL群では年児や性別による有意差は認められなかった。以上のことから、仲間関係の発達とその性差が、意図の帰属に関する認知発達を規定していることが考えられた。

キーワード：社会的地位, ポジティブな場面, 意図, 帰属, 幼児

問 題

幼児期は、仲間との関わりを通して意図の理解が発達する時期である。意図を理解することによって、相互理解を深め、所属感を高めることにつながる。この所属感が、さまざまな学習や活動に対する欲求の基盤となる(吉村, 2019)。そして、Reddy (2008)によると、自分自身や他者の意図に気づくことは関わることに依存している。それゆえ、幼児期における仲間との関わりは、意図を理解する認知発達においてきわめて重要な体験である。

これまでの発達に関する心理学的研究では、仲間との関わりを示す指標として社会的地位を取り上げ、その地位に応じた特性が多くの研究で検討されてきた。社会的地位とは、仲間からの被選択の程度に応じた地位である。Newcomb, Bukowski & Pattee (1993)によると、多くの仲間から選択

される人気児は、一般的に攻撃的でも引込み思案でもなく、社交的であった。十分に好かれている子どもは、友人関係の機会をより多くもつことから(Bukowski, Pizzamiglio, Newcomb & Hoza, 1996)、社会性を学習する環境を構築されやすい。それゆえ、社会的地位はその子どもの特性に規定されている。逆に、嫌われている子どもや印象の薄い子どもは、向社会的な意図をもった者や偶発的に危害を加えた者の意図を誤って敵意として帰属しやすい(Dodge, Murphy & Buchsbaum, 1984)。つまり、社会的地位が低いと思われる子どもは、高い子どもに比べると、意図の理解の正確さに欠けることが示唆される。また、Panella & Henggeler (1986)によると、社会的コンピテンスに乏しい者同士の相互作用では、ポジティブな行動を欠いていた。以上のことから、仲間と関わる

¹高知学園大学 健康科学部 管理栄養学科 *Email: hyoshimura@kochi-gc.ac.jp

体験を通して社会性を学習する機会を得ていることになる。したがって、社会的地位のあり方に応じて、意図の理解の発達過程は異なることが推察される。

意図の理解に関する研究では、仮想的な対人場面において、葛藤を引き起こした相手の意図に敵意があったか否かを測定する方法が多く見られる。そこから、また正確に帰属することの重要性が指摘されてきた (Dodge, 1986)。Dodge (2006) によると、多くの子どもが善意の帰属を学習していく中、敵意帰属バイアスに捉われることによって、社会化過程における共通した経験を有している。その個人差が、他者の意図を理解する力として発達し、仲間関係を形成し維持する社会的スキルに影響を及ぼす関係が解明されている。

しかし、Sato & Wakebe (2014) によると、仮想的な被害を受ける場面の物語では、加害者の意図を好意的に捉えるバイアスが幼児に見られる。また、Knobe & Burra (2006) によると、ネガティブな行為はポジティブな行為に比べると意図的に判断されやすい。それゆえ、自分が被害を受けるネガティブな場面を対象とした意図に関する研究では、敵意を帰属しにくいことが示唆される。そこで、鈴木 (2014) は、ネガティブな条件とポジティブな条件との比較検討を行った。その結果、対人葛藤を含む場合、5歳児でも意図の理解は難しいことが示唆された。これらの傾向について、鈴木 (2016) は、現実の場面になると、ネガティブな結果によって生起する情動が正確な認知的判断を妨げていると分析している。Izard (1991) も、喜びは興味による活動に基づいて生じ、他者への愛情や相互の信頼を発展させ、社会的に結びつける機能があることを述べている。このように、幼児における他者の意図の帰属は、ポジティブな情緒が生まれる場面とネガティブな情緒が生まれる場面との間で異なる認知過程を有することが推察される。

この推察を参考に、吉村 (2018) は、肯定的な情緒を生む場面と否定的な情緒を生む場面との比較検討を試みた。その結果、他者の誤った信念を

正しく理解できる幼児は、どちらの場面においても他者の意図を状況に合わせて帰属していることが示唆された。しかし、この研究で社会的地位は考慮されていない。人気のある子どもは援助的で思慮深く、仲間との相互作用を調整するルールに従っていることから (Coie, Dodge & Kupersmidt, 1990)、相手の心理状態を考えながら行動することが示唆される。さらに、鈴木 (2016) の指摘に基づく、ポジティブな情緒が生まれる場面では、認知的判断を妨げる要因が排除され、正確に判断されやすいと思われる。

以上のことから、社会的地位の程度は、ポジティブな場面においても、他者の意図を理解する認知の発達を規定することが考えられる。しかし、幼児期は他者理解が著しく発達する過程にある。それゆえ、正しいか否かを測定することは、社会的地位だけでなく、多様な要因による相互作用の影響も考えられる。そこで、本研究では、意図の方向性をどのように推論するかに焦点を当て、帰属として取り上げることとする。また、ポジティブな場面における他者の意図の理解については、ネガティブな場面との比較対象として取り上げたものはあるものの、ポジティブに焦点を当てた議論は十分とはいえない。それゆえ、不明な点も多い。その原因の1つとして、ネガティブな場面であるほど、個々の認知過程による影響が生まれやすく、発達に影響を及ぼす要因として明白であることが考えられる。問題解決に関する考察にもつなげやすいことから、幼児教育を支援し寄与する視点を提供しやすい。それに対して、ポジティブな場面ではトラブルが起こることも少ない。それゆえ、問題解決の必要性は低いことから、研究の焦点が当てられることも少なくなる。さらに、ポジティブな場面を取り上げる場合は、影響を及ぼす要因を具体的に絞らなければ、あまり個人差は見られないことが予想される。その要因の1つとして、認知過程と深く関係する社会的地位が考えられる。幼児における意図の理解に関する発達を把握するためには、さまざまな場面との整合性や違いを検討することが不可欠である。さらに、幼児期

の社会的地位と後の学校適応・不適応との関連性も示唆されている（前田, 2012）。したがって、ポジティブな場面における幼児の社会的地位と意図の帰属との関係を解明することは、幼児の認知発達をさらに広い視点から総合的に把握するだけでなく、保幼小中連携・接続を推進する活動を支援する上でも意義のあるテーマといえる。

そこで、本研究では、ポジティブな情緒が生まれ、その情緒を体験しやすい場面を「ポジティブな場面」として位置づけ、その場面における幼児の社会的地位の程度に応じた意図の帰属の違いを検討する。Newcomb et al. (1993) や Bukowski et al. (1996) に基づくと、社会的地位の高い幼児は場面の状況に応じて意図を帰属すると考えて支障はない。ただし、男女間で仲間関係の展開が異なるとする先行研究は多いことから、性差を考慮しなければならない。Coie, Dodge & Coppotelli (1982) によると、協力に対する仲間査定では女兒の方で社会的地位による影響が強かった。Taylor & Asher (1984) においては、協同や援助について、女兒における社会的地位への影響が見られた。一方、男児は攻撃性が社会的地位を強く識別していた (Perke & Slaby, 1983)。つまり、ポジティブな場面では、社会的地位の高い女兒が、低い女兒に比べて、意図のポジティブさをより高く帰属することが予想される。

道徳性の発達に関する多くの伝統的理論に基づくと、幼児期の自己中心的思考は5歳児以降に減少することで共通している (大伴, 1960)。ただし、Miller, Danahar & Forbes (1980) によると、女兒では自分の言い分を主張したり相手の主張を聞いたりする機会が、男児に比べると少ない。それゆえ、日常の遊びにおいて、相互理解し合える仲間交渉の機会は、男児に比べると少ないことが推察される。つまり、男児は他者の意図を考え、それを調整する経験を、早い時期から遊びを通じて蓄積しやすい。他方、女兒の場合、男児に比べると、その経験の蓄積は緩やかになると思われる。したがって、社会的地位が高い幼児の中でも、特に女兒における意図の帰属は、4歳児と5歳児の間で

異なり、それも5歳児の方が意図のポジティブさをより高く帰属することが予想される。

以上のことから、本研究では、次の仮説を設定して検討を行う。

仮説：女兒の場合、社会的地位の高い5歳児は、4歳児に比べて、ポジティブな場面における意図をより高く帰属する。他方、男児では、社会的地位の高い5歳児と4歳児との間に意図の帰属に大きな差は見られない。

方法

調査対象者

A県内私立幼稚園の4歳児クラスに在籍する26名（男児15名、女兒11名）、5歳児クラスに在籍する43名（男児23名、女兒20名）を対象とした。4歳児と5歳児を対象にした理由は次の通りである。幼児を対象とする際に言語を用いて調査を行う場合、対象児の言語能力の問題も考慮しなければならない。この方法が関連するラベリング課題について、Brecht, Picard & Baldy (2009) は4、5歳児から可能であると指摘している。この考えに基づき、本研究では幼稚園4歳児クラスと5歳児クラスに所属する園児を対象に検討することとした。

なお、質問に対して無反応状態が3分以上続いたり、明らかに質問に対応しない回答をしたりした場合は、分析の対象から外すこととした。

手続き

1. 社会的地位の測定で用いる仲間選択の調査

対象者の社会的地位を測定するため、仲間選択に関する質問を行った。質問に当たっては、園における場面において、同じクラスに所属する仲間から、一緒に活動したい園児1名を求めた。場面については、調査協力園で教育実習を行った学生の振り返りを参考に、活動の趣旨が異なる保育活動、昼食、降園の中から園活動で体験しやすい場面を選出し、リズム遊び、お弁当、帰りの会の3場面を設定した。質問に当たっては、場面想定法を採用し、各場面の状況において一緒に活動したい仲間を所属クラスから挙げてもらった。質問の

際には、場面の様子を示した図 (Figure 1) を提示して進めた。複数の名前があった際には最初に挙げた名前の子どもを分析の対象とした。

(1) リズム遊び

リズム遊びをクラスのどの園児と一緒にやりたいかを把握するため、一緒に活動したい園児を挙げてもらった。質問は「今からリズム遊びをします。(対象児の名前)は、(対象児の所属するクラスの名前)組の中で誰と一緒にやりたいですか。」と尋ねた。

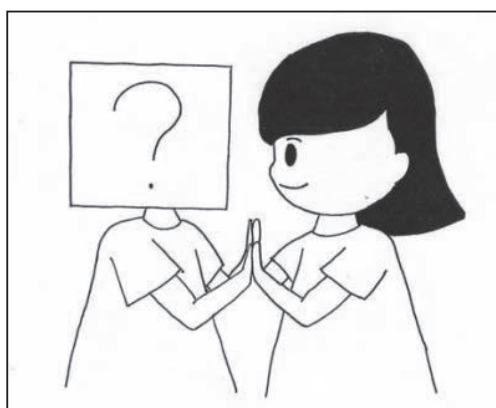


Figure 1. 仲間選択の調査で用いた図 (リズム遊びの場面, 女児用)

(2) お弁当

リズム遊びの場面と同様、図を提示しながら「今日のお弁当の時間は、遠足みたいに自由に座って食べます。一緒に食べたい2人組をつくってください。この時、(対象児の名前)は、(対象児が所属するクラスの名前)組の中で、誰と一緒にお弁当を食べたいですか。」と尋ねた。

(3) 帰りの会

図を提示して場面の状況を説明し、「今から帰りの会を始めます。手をつないで2人ずつペアをつくってください。この時、(対象児の名前)は、(対象児が所属するクラスの名前)組の誰と手をつないでペアになりたいですか。」と尋ねた。

2. 意図の帰属の測定

まず、調査協力園で事前に活動の様子を観察し、質問で用いる場面設定の参考にした。その結果、園活動で展開されやすい状況を示す3つの物語を

作成した。場面設定にあたっては、調査予定時期の前によく行われていた活動や、定期的に行われる活動を基本とし、色水遊び、身支度、折り紙の場面を選出した。次に、質問に当たっては、意図と行為を構成する信念-願望推論の課題 (Wimmer & Perner, 1983) を参考にした。また、喜びと社会的結びつきとの関係が示唆されていることから (Izard, 1991)、各場面におけるポジティブな情緒として「喜び」が生まれやすい状況に関する物語を作成した。

なお、物語の内容的妥当性を確認するため、本研究の協力園以外に所属する幼稚園教諭3名に見解を求めた。採用にあたっては、3名中2名以上で妥当であると判断された物語を採用することを条件とした。その結果、すべての質問で全員より「幼稚園で起こりうる場面であるとともに、幼児が意図を帰属する内容である」との見解で一致した。したがって、本調査では(1)~(3)に示す物語を採用することとした。

質問を行う際には、物語の様子を示した図 (Figure 2) を作成し、その図を提示しながら、作成された物語を説明した。物語の内容を理解したことを確認した上で、他児の意図の帰属について質問した。測定にあたっては、4、5歳頃から表情の理解や感情の状態を弁別する能力が急激に発達することから (杵田, 2014)、表情の図を用いることで、言葉による説明能力の個人差を補うことができる。そこで、吉村 (2018) で用いられた肯定的場面における情緒の程度を示す表情の略図を若干修正する形で作成し、その図を提示しながら4件法で選択を求めた (Figure 3)。

なお、Karniol & Koren (1987) によると、ネガティブな自己の感情推論は他者の感情推論に比べて困難であることが指摘されている。ポジティブについての言及はないものの、本研究ではKarniol & Koren (1987) の指摘を参考に、他者の意図を帰属することで測定することとした。さらに、調査後の仲間関係に支障を来すことを避けるため、物語中のA児とB児にはクラスにいない架空の名前を入れて説明することとした。

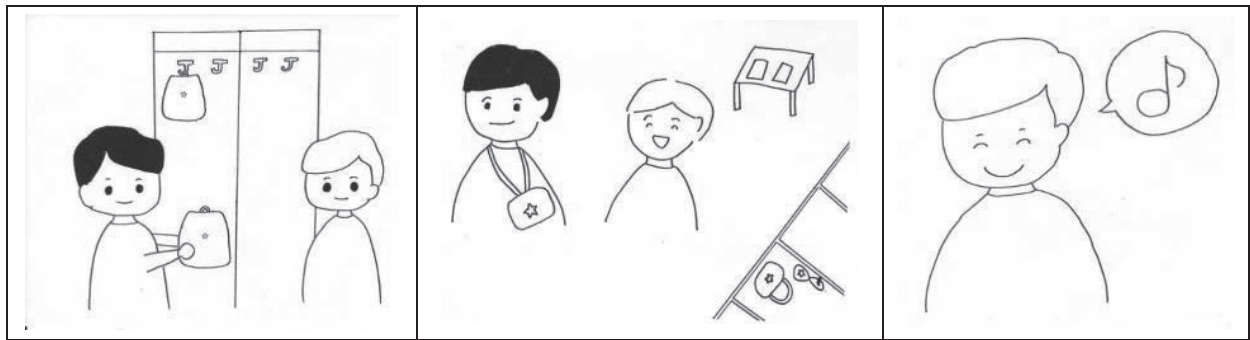


Figure 2. 場面の状況を説明する際に用いた図（身支度の場面，男児用）

（1）色水遊び

A児が色水遊びをしています。すごくきれいなピンク色が出てきました。横でつくっているB児のつくった水色の色水の容器にピンクの色水を入れました。すると、B児は色の変化を見ることができ、喜びました。A児は、なぜB児の色水にピンクの色水を入れたのでしょうか。

（回答後）A児は、B児をどれくらい喜ばせようと思ってピンクの色水を入れたのでしょうか。

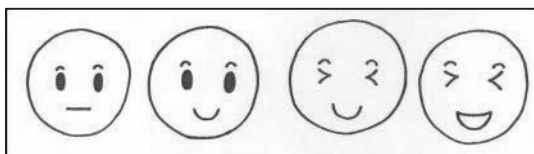


Figure 3. 意図の帰属の測定で用いた図
（左より1～4点で得点化）

（2）身支度

朝の身支度の場面です。A児が朝の荷物を片付け終わると、B児が登園してきました。A児が、B児の荷物を片付けてあげようと思いました。すると、B児は「ありがとう」と喜びました。A児は、なぜB児の荷物を片付けてあげたのでしょうか。

（回答後）A児は、B児をどれくらい喜ばせようと思って片付けてあげたのでしょうか。

（3）折り紙

今から折り紙をします。赤と青と黄色と茶色の折り紙の中から好きな色を1枚選びます。B児はトイレに行っていて、折り紙を選ぶ時にはいませ

んでした。A児は、B児がいなかったので、茶色の折り紙を取ってあげました。B児が戻ってきて、A児がB児に茶色の折り紙を渡しました。B児は、茶色の折り紙を受け取ると、茶色で栗を折るつもりだったので喜びました。A児は、なぜB児に茶色の折り紙を渡したのでしょうか。

（回答後）A児は、B児をどれくらい喜ばせようと思って茶色の折り紙を渡したのでしょうか。

調査の実施

本研究では、一緒に活動したい仲間を選択することから、クラスの仲間関係が落ち着き、対象者が状況に応じて適切に仲間を選択することができるよう配慮しなければならない。そこで、4歳児、5歳児とともに遊戯的共有が高い時期（岩田, 2019）である2019年11月下旬から12月中旬にかけ、幼稚園のホールを利用して個別面談を行った。なお、本研究を実施するにあたり、筆者の所属機関における研究倫理審査委員会において研究目的と計画およびインフォームド・コンセントの手続きなどに関する審査を受け、その承認を得て実施された（令和元年度承認番号42号）。

結果

社会的地位の群化

一緒に活動したいと選択された各児の被選択数を基に3群化を行った。4歳児については4歳児クラス全体の平均値 ($M=2.73, SD=2.22$) に基づき、 $M \pm 1/2SD$ に応じて、多くの園児から選択された「社会的地位H群」、平均値付近に当たる「社会的

地位M群」,あまり選択されなかった「社会的地位L群」に分類された。5歳児についても,5歳児クラス全体の平均値 ($M=2.77, SD=2.06$) に応じて同様の手続きで社会的地位H群, M群, L群の3群に分類した。

意図の帰属と社会的地位との関係

本研究の主たる目的は,社会的地位の程度に応じて,意図の帰属が異なるか,またその関係が性別や年児に応じてさらに異なるか否かを解明することである。そこで,意図の帰属については,場面あたりの平均値を尺度得点として算出し,これを従属変数とした性別(2)×社会的地位(3)×年児(2)の三要因分散分析を行った。多重比

較は,有意水準を $\alpha=0.05$ としたTukeyのHSD法を用いた。また,各変数における意図の帰属得点に関する平均値と標準偏差,人数などをTable 1,分散分析におけるF値などをTable 2に示した。

分散分析の結果,社会的地位,年児,性別それぞれの主効果や二要因の交互作用は認められなかった。ただし,これら三要因の相互作用が有意であった。 $(F(2, 57)=3.42, p<.05, MSe=.44)$ 。単純主効果の検定を行うと,女兒の社会的地位H群における意図の帰属得点では,5歳女兒が4歳女兒に比べて有意に高かった $(F(1, 57)=8.26, \text{Figure } 4)$ 。その他の社会的地位の群および男児では有意差が認められなかった。

Table 1 性別(A),社会的地位(B),年児(C)各変数における意図の帰属の平均値と標準偏差

A	男児						女兒					
	H群		M群		L群		H群		M群		L群	
B	4歳		5歳		4歳		5歳		4歳		5歳	
C	4歳	5歳	4歳	5歳	4歳	5歳	4歳	5歳	4歳	5歳	4歳	5歳
N	4	7	4	6	7	10	5	7	3	8	3	5
M	3.08	2.86	2.75	3.11	3.05	3.30	2.27	3.38	3.00	3.21	3.33	2.87
SD	0.32	0.66	0.74	0.98	0.62	0.62	0.60	0.56	0.33	0.64	0.88	0.69

N:人数, M:平均値, SD:標準偏差

Table 2 意図の帰属における性別(A)×社会的地位(B)×年児(C)の三要因分散分析によるF値

独立変数 従属変数	性別	社会的地位	年児				
	(A)	(B)	(C)	A×B	A×C	B×C	A×B×C
df (57)	1	2	1	2	1	2	2
意図の帰属	.01	.69	1.48	.31	.21	.96	3.42*

* $p<.05$

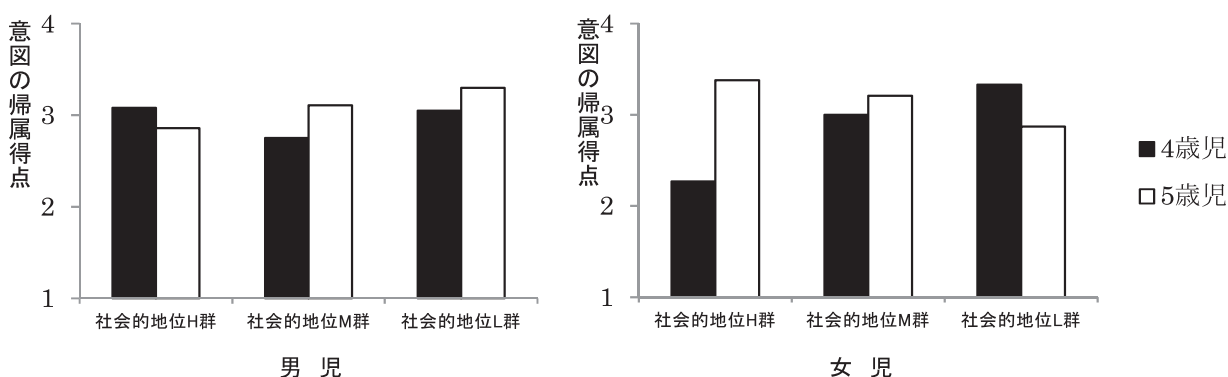


Figure 4 意図の帰属に対する性別に応じた社会的地位と年児との関係

考 察

本研究では、幼稚園4歳児クラスと5歳児クラスに所属する幼児を対象に、クラス内の社会的地位と各児の意図の帰属との関係、およびその性差と発達を検討した。以下では、得られた結果に基づいて考察を行うこととする。

本研究の目的は、社会的地位の高い5歳女児は、4歳女児に比べて、ポジティブな場面における意図をより高く帰属するか否かを明らかにすることであった。このことは、性別、社会的地位、年児の交互作用によって考察することができる。ポジティブな場面を取り上げた本研究では、意図の帰属を従属変数とした分散分析において3要因の交互作用が認められた。つまり、社会的地位が高い女児では、5歳児が4歳児に比べて、相手が「喜ばせよう」とする意図をより強く有していると帰属していることが示唆された。一方、男児ではいずれの主効果も交互作用も有意差は認められなかった。

前田（2012）によると、人気のある子どもは、平均的な子どもと同様に自己主張しているが、状況判断や行動コントロールができています。それゆえ、状況に応じて他者の意図を帰属しやすいことが示唆される。しかし、本研究では、4歳女児で社会的地位H群における意図の帰属の低さが有意であった。小嶋（2012）によると、ポジティブな感情もネガティブな感情も5歳前後に発達の大きな変化が起き、特に5歳児頃に他者のうれしさを状況から推測できるようになる。それゆえ、5歳児が4歳児に比べてポジティブな場面における意図を正しく帰属することができていたと考えて支障はないだろう。そこで、以下では、性差に基づいてさらに考察を進める。

Eisenberg（1992）によると、多くの文化では養育性と援助的行動を女子にとって適切なものとみなす傾向がある一方で、本当の差異を表しているのではないにも関わらず、周囲が女子には養育性などを強化することも指摘されている。さらに、前田（1989）によると、拒否される特徴である否定的発言を、女児は抑制していると教師に評価されやすかった。自己主張・実現の発達を検討した

柏木（1988）の研究では、さらに女児の発達が4歳頃に停滞する現象が見られた。男児にこの現象は見られない。高橋・藤崎・仲・野田（1993）より、この理由として母親の発達期待およびしつけによる影響も考えられる。つまり、幼児期の女児に対して、周囲との大人が否定的発言など他者とのトラブルにつながる言動を抑制するようしつけたり、方向づけたりすることによって、いざこざの経験が男児に比べると一時的に少なくなることが予想される。いざこざとは、課題解決の場や対人的相互交渉の場といった学びの場である（高橋、2011）。つまり、攻撃性などネガティブな情緒を生みやすい言動と、仲直りをしてポジティブな情緒を生みやすい言動が併存する学習の機会である。その他者理解が発達するいざこざの経験が、周囲の役割期待によって女児の経験が抑制されることが推察される。特に柏木（1988）の結果より、女児が4歳頃に自己主張を行う機会が少なくなるとすれば、その結果として本研究における男女間の差として表れたことが考えられる。

ただし、ポジティブに関する意図に焦点を当てた心理学的研究は、まだ十分な検討がされていない。それゆえ、ポジティブに絞った意図の帰属を考察するには課題が残されている。まずは、鈴木（2014）や本研究を契機に、さらに具体的な要因を取り上げた研究を積み重ねていくことが望まれる。

以上のことから、本研究では、ポジティブな情緒が生まれる場面における他者の意図をポジティブな方向へ帰属することには、発達差だけでなく性差も関係していることが示唆された。すなわち、男児では発達差が見られないことに対して、女児では社会的地位H群で5歳児より4歳児の方がポジティブな方向へ帰属していることが示された。この知見より、本研究の仮説は支持されたと考えられる。

これまでは、ネガティブに注目した意図への気付きに関する研究が発展してきた。その結果、いざこざの経験から他者の感情を推測する支援を試みるなど、一定の成果が得られてきた。一般に、友好的に仲間と関わり、協力することのできる子どもは人気が高い（前田、2012）。社会的地位H群

に分類された女児も、当然この特性を有することが推察される。ただし、社会的地位の高さが本来発したい自己主張を抑制して仲間関係を形成・維持している結果であるとするれば、幼児期の4歳頃に発達上体験しておきたい学習機会が乏しくなることを意味する。今後、ポジティブな場面を検討する場合であっても、いざこざや仲直りの経験との関連を検討することが求められる。

本研究では、各要因の人数に偏りが見られ、各群の等質性を高めることに課題が残されている。また、相関研究であることから、因果関係を特定することはできない。測定方法の妥当性・信頼性に関する検証も今後進めることが必要である。このように、本研究では解決されていない問題が残されている。それでも、ポジティブな場面に焦点を当てて、幼児の意図に対する帰属を考える際に性別と年児に応じた違いが示されたことは、幼児の発達過程を考慮した活動計画を推進することが期待できる点で意義があると考えられる。

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

謝辞

本研究にご協力くださいました幼稚園の園児の皆様、保護者の皆様、教員の皆様に、改めて謝意を表します。また、本研究は、令和元年度に高知学園短期大学幼児保育学科に在籍していた2年生16名（秋田一成さん、井東汐音さん、井上さつきさん、植村莉奈さん、大平寧音さん、岡崎朱里さん、小島由衣さん、金子怜加さん、刈谷千春さん、塩田彩さん、末政真依さん、武田晴仁さん、谷村優香さん、近森栞里さん、橋本栞さん、森田唯さん）の協力を得て準備・実施されました。皆様にも深く感謝いたします。

引用文献

Brecht, C., Picard, D., & Baldy, R. (2009). How does Sam feel? Children's labeling and drawing of basic

emotions. *British Journal of Developmental Psychology*, **27**, 587-606.

Bukowski, W. M., Pizzamiglio, M. T., Newcomb, A. F., & Hoza, B. (1996). Popularity as an affordance for friendship: The link between group and dyadic experience. *Social Development*, **5**, 189-202.

Coie, J. D., Dodge, K. A., & Coppotelli, H. A. (1982). Dimensions and types of social status: A cross-age perspective. *Developmental Psychology*, **18**, 557-569.

Coie, J. D., Dodge, K. A., & Kupersmidt, J. B. (1990). Peer group behavior and social status. In S. R. Asher & J. D. Coie (Eds.), *Peer relation in childhood*. New York: Cambridge University Press, Pp.17-59.

Dodge, K. A. (1986). A social information processing model of social competence in children. In M. Perlmutter (Ed.), *The Minnesota Symposium on Child Psychology; Vol.8. Cognitive perspectives on children's social and behavioral development*, Hillsdale, NJ: Erlbaum, Pp.77-128.

Dodge, K. A. (2006). Translational science in action: Hostile attributional style and the development of aggressive behavior problems. *Development and Psychopathology*, **18**, 791-814.

Dodge, K. A., Murphy, R. R., & Buchsbaum, K. (1984). The assessment of intention cue detection skills in children: Implications for developmental psychopathology. *Child Development*, **55**, 163-173.

Eisenberg, N. (1992). *The caring child*, New York: Harvard University Press. (アイゼンバーグ, N., 二宮克美・宗方比佐子 (訳). (1995). *思いやりのある子どもたち：向社会的行動の心理* 京都：北大路書房 Pp.22-50.)

岩田美保 (2019). 幼児期の親密な仲間間の「おもしろい」・「楽しい」の感情言及機能：その関係構築に果たす役割に着目した発達の検討 *発達心理学研究*, **30**, 44-56.

Izard, C. E. (1991). *The psychology of emotions*. New York: Plenum Press, Pp.131-152.

柏木恵子 (1988). *幼児期における「自己」の発達*.

- 行動の自己制御機能を中心に 東京：東京大学出版会 Pp.17-43.
- 小嶋佳子 (2012). 幼児における他者感情の理解と対処 深田博己 (監). 湯澤正通・杉村伸一郎・前田健一 (編). *心理学研究の新世紀3 教育・発達心理学* 京都：ミネルヴァ書房 Pp.258-275.
- Knobe, J., & Burra, A. (2006). The folk concept of intention and intentional action: A cross-cultural study. *Journal of Cognition and Culture*, **6**, 113-132.
- Karniol, R., & Koren, L. (1987). How would you feel? Children's inferences regarding their own and others' affective reactions. *Cognitive Development*, **2**, 271-278.
- 前田健一 (1989). 幼児の仲間内地位と社会的スキルの教師評定 日本教育心理学会第31回総会発表論文集, 152.
- 前田健一 (2012). 子どもの仲間関係 深田博己 (監). 湯澤正通・杉村伸一郎・前田健一 (編). *心理学研究の新世紀3 教育・発達心理学* 京都：ミネルヴァ書房 Pp.159-184.
- 栢田 恵 (2014). 幼児期における感情の理解と感情表現の発達 *発達心理学研究*, **25**, 151-161.
- Miller, P. M., Danahar, D. L., & Forbes, D. (1980). Sex-related strategies for coping with interpersonal conflicts in children aged five and seven. *Developmental Psychology*, **22**, 543-548.
- Newcomb, A. F., Bukowski, W. M., & Pattee, L. (1993). Children's peer relations: A meta-analytic review of popular, rejected, neglected, controversial, and average sociometric status. *Psychological Bulletin*, **113**, 99-128.
- 大伴 茂 (1960). *ピアジェ 幼児心理学入門* 東京：同文書院 Pp.157-170.
- Panella, D., & Henggeler, S. W. (1986). Peer interactions of conduct-disordered, anxious-withdrawn, and well-adjusted black adolescents. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **14**, 1-11.
- Perke, R. D., & Slaby, R. G. (1983). The development of aggression. In E. M. Hetherington (Ed.), *Handbook of child psychology: Vol.4. Personality and socialization process (4th ed.)*, New York: Wiley, Pp.547-641.
- Reddy, V. (2008). *How infants know minds*. New York: Harvard University Press. (レディ, V., 佐伯 胖 (訳). (2015). *驚くべき乳幼児の心の世界：「二人称的アプローチ」から見えてくると* 京都：ミネルヴァ書房 Pp.190-233.)
- Sato, T., & Wakebe, T. (2014). How do young children judge intentions of an agent affecting a patient? Outcome-based judgment and positivity bias. *Journal of Experimental Child Psychology*, **118**, 93-100.
- 鈴木亜由美 (2014). 幼児の道徳的文脈における誤信念の理解 *発達心理学研究*, **25**, 379-386.
- 鈴木亜由美 (2016). 対人葛藤解決と心の理論 子安増生・郷式 徹 (編). *心の理論：第2世代の研究へ* 東京：新曜社 Pp.119-131.
- 高橋千枝 (2011). 仲間関係の発達と支援の実際 本郷一夫 (編). *シードブック 保育の心理学 I・II* 東京：建帛社 Pp.167-177.
- 高橋道子・藤崎真知代・仲真紀子・野田幸江 (1993). *子どもの発達心理学* 東京：新曜社 Pp.88-95.
- Taylor, A. R., & Asher, S. R. (1984). *Children's interpersonal goals in game situations*. Paper presented at the annual meeting of the American Educational Research Association. New Orleans.
- Wimmer, H., & Perner, J. (1983). Beliefs about beliefs: Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception. *Cognition*, **13**, 103-128.
- 吉村 斉 (2018). 肯定性－否定性が異なる環境における幼児の誤信念の理解と意図の帰属との関係 *高知学園短期大学紀要*, **48**, 99-107.
- 吉村 斉 (2019). 子どものやる気を高めるためには、どうしたらよいでしょうか 浅井拓久也 (編). *子どもの発達の連続性を支える保育の心理学* 大阪：教育情報出版 Pp.138-141.

受付日：令和2年10月15日

受理日：令和2年12月24日

Original Paper

The Influence Sociometric Status on Young Children's Attribution to Others' Intentions concerning Positive Situations

Hitoshi YOSHIMURA^{1*}

Abstract: This study examined the relationship between young children's sociometric status and their attribution to others' intentions concerning positive situations where people feel happy. Participants in this study were 69 kindergarteners (26 4-year-olds, and 43 5-year-olds). The research was conducted using face-to-face interviews, and the following significant results were obtained: 5-year-old girls' scores of attribution to others' intentions were higher than 4-year-old girls' scores in the sociometric status H group. This result indicated that 5-year-old girls, who were chosen for activities by their peers, more correctly identified others' intentions in the process of pleasing their peers than 4-year-old girls. However, boys' scores in the H group were not significantly different according to their grades. In addition, the scores in both the M and L groups were not significantly different according to their grades or sex. Therefore, the development of peer relations and sex differences may significantly influence cognition developments in the matter of attribution to others' intentions among young children.

Key Words: sociometric status, positive situation, intention, attribution, young children.

¹ Kochi Gakuen University, Faculty of Health Science, Department of Nutrition, *Email: hyoshimura@kochi-gc.ac.jp